



高家博成・中山れいこ編集・解説 (2014)
「虫博士の育ち方 仕事の仕方 (生き物と遊ぶ
心を伝えたい)」

本の泉社, 303 頁, 価格 1,944 円,
ISBN : 978-4-7807-1178-8 C0095

著者は多摩動物公園の飼育係として創意工夫に満ちた昆虫類の展示に手腕を発揮したばかりでなく、TBS 系列のラジオ番組の「全国こども電話相談室」や「NHK 夏休みこども科学電話相談」の解説者としても知られている。

著書の内容は、著者が幼年期から半世紀以上の長期にわたって体験した生き物とのかかわりをユニークな自分史としてまとめたものである。これらの多くは既に発表した著作や、それらに若干手を加えて新たな体裁にしたことが緒言に記されているが、下記の 17 章から構成されている。

I 丹後にいた頃, II 大学生時代, III 動物園に勤める, IV 標本室の展示構成の工夫, V 動物園の大きなニュース, VI 新しい展示昆虫を求めてオーストラリアへ, VII 南園飼育係長時代, VIII 井の頭自然文化園水生生物館長時代, IX 昆虫飼育係長時代, X 定年・嘱託時代, XI 大学の非常勤講師, XII 世界と日本, XIII 日本人の動物観, XIV 昆虫教室・昆虫相談, XV 生き物を楽しむ, XVI 絵本を作る, XVII この頃。

上記の目次が示しているように、記述内容は昆虫以外の多岐の分野に及んでいるが、これは長年にわたる著者の多面的活動を示すもので、これらの中から昆虫類にかかわる主要な章について紹介したい。

I および II は幼・少年期から大学生までに体験した自然、とりわけ昆虫とのかかわりが懐かしく述べられている。大学生時代には母校である東京農業大学での体験が綴られ、中でも八木誠政博士の生理・生態学の研究方法に関する講義は著者に大きな刺激となった。また、著者の博士論文である「カメノコロウヤドリバチの形態学的研究」で、この種の筋肉系観察のため体長 2 mm 程の微小個体の解剖方法の記述は参考になる。III ではミズスマシの飼育を通じて得た幼虫・成虫の生態的観察結果を記述、またゲンゴロウの呼吸方法やメダカハネカクシの水面滑走を紹介し、さらにテントウムシの形態視反応や負の走地性を利用した「テントウムシの遊園地」の展示や、カブトムシ

幼虫の雌雄判別法も記されている。なお、カブトムシ幼虫時代に排泄した糞すべてを集めて名刺大の紙に貼り付けたところ、その数が 1 万個に達した話などこの章には興味深い話題が多い。IV では昆虫とはどんな動物かに焦点を当てた展示の中で、多様な昆虫の体のしくみや生態を解説し、大型甲虫の体重比較としてゴライアスオオツノハナムグリ 13.3g、カブトムシ 1.5g (生体 7g)、ヘラクレスオオカブト 12.5g、カシクスオオツノハナムグリ 11g、ミヤマクワガタ 0.7-0.8g、等が紹介されている。VIII には展示ゲンゴロウの餌不足の場合、煮干しの利用が紹介。IX から XVII 迄は直接甲虫に関する記述はないが、IX では外国産昆虫展示のためペルーでのハキリアリの採集や日本に持ち帰った後の苦労話は興味深い。X ではオオゴマダラをパラベンを用いて指先に止まらせたり、この蝶の翅のコピーを切り抜いて細い棒の先に貼り付け、それを振ってこの蝶を呼び寄せる実演の紹介は楽しい。XI この章の中ではゲンジボタルの幼虫の餌として外来巻貝のコモチカツボが日本の河川に放流されることで在来のカワニナの生息に影響を及ぼし、本来の生態系が破壊されることへの危惧が述べられている。なお、これとの関連事項を XII でも取り上げている。XIV では子供の素朴な質問ほど回答が難しいと述べ、その 1 例として「昆虫の脚はなぜ 6 本なの」が示されている。XV は昆虫に関係している研究会や同好会を紹介し、それらに参加して得られた経験談は楽しく読み進める。XVI 子供のための科学読み物研究会で受賞した「ありのごちそう」をはじめ、一連の絵本作成の苦労が語られている。XVII では八丈島でニッポンヒラタキノコバエの観察内容と韓国でのエコミュージアムに参加したことを述べ、我が国の博物館活動の一層の積極的活動を要望している。

以上がこの著書の主要な内容であるが、文中を通して著者の生き物に対する優しさが随所で感じられ、副題の「生き物と遊ぶ心を伝えたい」の言葉は読者におおきな共感を呼ぶことと思われる。なお、文中に登場する珍しい事柄や生き物については、中山れいこ編集解説者が簡潔ながら明快な脚注をほどこして読者の理解を一層深められるように配慮されている。また、文中に引用した文献名や動植物のそれぞれの学名も巻末に示されている。

(渡辺泰明, 町田市)